

## 世界を俯瞰する眼

——インタビュー：樺山紘一教授に訊く——

**クリオ：**先生はこれまでご専門である西洋中世だけでなく、それを大きく超えて、さまざまな分野・問題について書かれてきました。しかしながらその筆先が先生ご自身に向けられることはあまりなかったように思われます。そのような意味で今回のインタビューの目的は、先生ご自身にご自身のことをまとめたかたちで語っていただく、ということにあります。中世史を志す若い学徒のなかで、先生が一人の歴史家としてどのような歩みをしてこられたのかということに大いなる関心がある、それが本インタビュー企画の出発点になっています。

**樺山：**ありがとうございます。本当にしがいない歴史家で、ろくにまとまった仕事もできず、さりとてもう若くもなく、今後大きな仕事ができるわけでもなく恥ずかしい限りで、学生さん方にそう言われるととても困惑してしまうというのが本当のところですよ。ただ甚だしがいないのだけれども、歴史家は歴史のなかで生きてきていますので、それなりの歴史をもっているというのは当然のことですし、やはり歴史家にとって一番大きな関心の一つは、歴史家がどう生きたか、ということではないかと思うのですね。

かつてあれはE・H・カーでしたか、「歴史を読む前にまず歴史家を調べなさい」と言っていますが、本来私たちが歴史を読む時にはその歴史家を読む作業からはじめたいものだというふうにもかねてから考えておりました、そういう心構えもしてきたし、今後もしできればそういう作業をしてみたいとも考えていました。これはたった今できあがったばかりの本ですが、『20世紀の歴史家たち』(刀水書房)の、これは「世界編」の下巻です。これまで4巻出してきまして、もう1巻出るはずですよ。こういうシリーズを作った趣旨はいま申したことに沿っていると考えていただきたいのです。私も若い時そうだったけれども、得てして自分の仕事が優先していますので、一本でも多く論文を書きたい、一枚でも長い論文を書きたいと考えるものですから、自分の対象だけに関心を限定しがちです。でも、自分が相手にしている歴史家がどうしてこういう命題を立てたのかということ、やはりそれを書いた歴史家のフォーメーション、自己成型のなかでしか理解できないのではないかという気がしています。

今、大学院生あるいは若い歴史家の方々が先行の歴史家についての関心を失いつつあるのではないかという危惧感というのは率直に言っております。この本で対象になっている歴史家はみな19世紀の末前後に生まれた古い人たちばかりで現存の人たちは少ないのですが、できれば今これから歴史を勉強する人たちに読んでほしいなと思っています。また、今届いたばかりの『史学雑誌』(第110編第1号)で木村靖二さんが「歴史家の歴史と歴史学の歴史」というタイトルのコラムで書いているように、やはり歴史家について論じることが歴史学の重大な課題の一つだということです。僕みたいなしがいない歴史家のことは考えなくてもいいから(笑)、大きな仕事をした大歴史家の、歴史家としての歴史のなかでの生き方をこれからも読んでいただきたいという趣旨です。刀水書房のこの本もそうですし、弘文堂の『歴史家とその作品』(歴史学事典 第6巻)というのも大分苦勞して作りましたけれども、たんに便利な書物ということだけではなく、それらを通して歴史家としての生き方というのをそれなりに吟味していただけたら、と考えています。つまり、僕なんか相手にしてもしようがないよ、というのが本心なのだけれども(笑)。

## Section 1： 歴史研究者としての自己成型

### 生い立ちと子供時代

クリオ： それではまずはじめに、先生の「歴史研究者への道程」についておうかがいしたいと思います。『対話「東北」論』のなかで、先生は「知的好奇心の目覚め」について少し書かれていますね。それは仙台疎開時代の小学校における「M先生」との出会いであった、ということですが。

樺山： 仙台へは疎開ではなくて父の転勤です。僕は1941年、太平洋戦争が始まるちょうど七ヶ月前、今住んでいるところ——もちろん戦争で焼けたので当時の家ではありませんけれども——に生まれました。父は内務官僚で鹿児島島の出身です。母は東京の生まれで、したがって、今私は母方の実家を引き継いで住んでいるということになります。それぞれについては、私にとって重大な意味合いがひとつずつあると思っています。

ひとつは父が内務官僚であったということです。転勤が非常に多くて、私が父の転勤にしたがって引っ越しをしたのだけでも六回かな、そのなかには中国の上海も入っています。昭和16年の秋ですから、生まれてすぐ上海に参りました。そこで暮らして1944年の初頭に日本に戻っているようなので、二年ちょっとですか。僕は三歳になる前ですからもちろん記憶はありませんけれども。記憶って後からいろいろなことを言われて確認するもので、そのうちに自分の記憶であるかのようになるものです（笑）。もちろん多少の記憶はあるのですが、それはなにも重大なことではなくて、応接間のソファの色だとか、そういうことです。中国残留孤児の方々は私よりも二つくらい下の人たちばかりですけれども、実際に覚えているのはやはりそういうことばかりなんですよね。大事なことを覚えていない、と言われたって、子供にとって何が大事かわかったものじゃない。いずれにしても中国での記憶はさだかではないんですが、ことによると体細胞のどこかにまだ長江の水が残っているのかもしれないと、あらかたジョークですけれども、そう言い続けています（笑）。このことは実は私だけではなくてかなり普遍的な問題だと思っていまして、例えば桜井万里子さんは中国生まれで、万里子というくらいですから万里の長城ですけれども、こういう人がたくさんいます。戦前、昭和ゼロ年代から私ぐらいまで——その後中国生まれというのは原理的になくなるわけですが——と、その後留学生達が行くようになるまでには非常に長い期間空白があります。だから私にとっては明確な記憶は何もないのですが、中国に対するある種のアイデンティティというのはずっと持ち続けています。私たちの周辺にそういう人はたくさんいるんです。

それでまあ、東京の小学校に入学しましたが、その後父の転勤で仙台に行くと、中学卒業の直前のほんの一、二ヶ月前までそこにおりました。したがって実質的には東京の高等学校に直接入ったんです。その間仙台にいましたが、その前の戦中戦後の時期にも、岡山ですとか鳥取ですとか、日本各地へ父の勤務がありましたのであちこち動きました。東京も含めてね。その間にやはり「ことば」、言語というか方言の相違、あるいは広くいうと文化の相違について、非常に強い実感を持ちました。今よりもはるかに方言の差異が大きかった時代ですから。そのころから地域社会とか地域文化とか呼ばれるものについての感受性というもの子供なりに磨かれたのだと思います。そうした体験も私だけではないはずで、転勤仕事で日本中ぐるぐる歩く仕事って今でもありますが、今は家族を途中で東京にかえしちゃってお父さんだけ単身赴任というのが多いけれども、昔は、少なくとも高等学校くらいまでは両親と一緒にいたんですよ。そうして日本中を見ることで、後にある種の地域性をおびたメッセージを発した研究者はたくさんいます。

ついでながら母方は、東京小石川で私で四代目になる、したがって百年近く前から

同じところに住んでいます、オーナー企業の出版社をやっている家柄で、明治書院といます。母方ですから、したがって今の当主は母の兄とその息子さんですが、私のいここにあたるその息子さんが四代目のオーナーです。同社は神田錦町に社屋を持って、日本近代における古文漢文教育とその出版を支えてきた、小さいながら、まあ老舗といわれている出版社で、私も子供の頃から周辺にかなりの数の漢文や古文書がありました。かなりといっても当時の数だから、引越しのごとになくしたり壊したりしていましたが、小学校終わるぐらいまでの間に『奥の細道』は全文暗唱できましたし、『論語』のいくつかの部分は白文で読めました。

クリオ：ほお（感嘆）。

樺山：その後すっかりそれを使ってないものだから何の役にも立ってないんだけど（笑）。ただし、古文辞についての関心というは家柄とともに持ち続けてきたと思っています。それで仙台はそういうことで、父の転勤仕事についていったんです。もちろんさつき申したような事情で、東北を含めて子供の時に生活した地域社会についての関心というのは非常に強く持ち続けています。

クリオ：そうした子供時代の経験や関心は、『カタロニアへの眼』に代表されるような、「地域」に関するその後のお仕事につながっていく、ということですね。

樺山：ええ、まっすぐつながっていると思っています。

#### 高校時代

クリオ：そうした、各地を転々とするという体験を経て、高校進学直前に東京に戻ってこられて、日比谷高校に進学されます。日比谷高校時代はどのように過ごされたのでしょうか。

樺山：これは言えば言う程嫌みに聞こえるので言わないことにしているんですが（笑）、戦前の旧制中学校、戦後のナンバー都立高といわれている学校は当時最高度の進学率を誇っておりまして、日比谷に限らず、戸山、新宿、西、小石川といったところが、今でいう「進学御三家」を超えるような存在であったということはよく知られている通りです。これもまたそのことの善し悪しも含めて、中等教育のあり方についての議論も必要ですし、私もこういう職業上、現場の先生、高等学校の校長方ともその種の議論はナマな形でやっていますので、当時の高等学校のあり方を議論することは、今を考える上でも無意味ではないとは思っています。でも具体的なことをいうと、またこれとっても嫌味なんですよ（笑）。あれも同級生、これも同級生という話になるわけでしょう。

クリオ：はいはい（笑）。

樺山：それはもう有名な人たくさんいます、私もこういう年齢なので今日本社会のリーダーシップをとっている人たちがたくさんいますが、別に彼らも当時から有名だったわけではないんだから、その頃はごく普通の高等学校友達です。ただそれが私たちにとって、その後の知的な形成の重要な出発点であったというのは間違いありませんね。

クリオ：高校時代はラグビーをなさっていたそうですね。

樺山：ほんとまあ、ラグビーとサッカーと陸上競技とかも、体を動かすスポーツばかりやっていました。それに当時の高校生のお小遣いで読める本は本当に乱読しました。当時日本で読めるものの多くは内外の文学でしたけれども、本当によく読んで、したがって受験勉強がいっこうにできず、ごく当然のこととして浪人をしました。よく一年で浪人が終わったと思っています（笑）。

#### 大学学部時代

クリオ：そして大学進学、ということになるわけですが、自らの進路について当時どのようなイメージというか、「夢」をおもちでしたか。

**樺山：** なんにもなかったと思うな (笑)。なにしろ同じクラスのうちの三分の二は同じ大学に進むという高等学校だったものだから、みんながいくからみんなについていくと。それ以外のなんでもなくて (笑)。マラソンやってるみたいなもので、一緒に走って後ろからおされて気がついたら入っちゃったっていう。まあ本当に進路なんてことは全く考えてもなかったんですが、ただ子供の頃から地域社会、地域の文化との接触がありましたし、ほとんど根拠のない話だけれども外国暮らしをしていて、外国に行けたらいいな、ということも当然ありました。今では外国へは誰でもいけるけれども、僕が大学に入った61年なんていうのは為替自由化前ですから、誰も行かなかった、用務でない限りね。だから外国に行けるような仕事ができればいいな、ぐらいのことは考えたと思うのですけれども、それ以外のことはろくに考えていませんでした。

**クリオ：** 最初に駒場時代のことを少しおうかがいしたいのですけれども、そこで出会った先生であるとか書物であるとか、何かとくに印象に残っているものがありましたか。

**樺山：** 僕は当時の文二 (現在の文三) に1961年に入りまして63年までいたのですが、浪人している間に、なんか勉強しておもしろいと思いはじめました。よくあんな試験勉強で入ったと思うのですが、もっぱら入学試験と関係ない本をたくさん読んだんですよ。ドイツ語もその時勉強しまして、入った時はドイツ語未修だったけども、テキストをほとんど辞書無しで読めました。ということで、要するに、浪人している間にチャージ、充電したんですね。だからすぐ放電できる状態で大学に入ったんだと思うな。だから読む本みんなおもしろかったです。おもしろい授業が多かった、というのが本当のところだと思うんだけど。ただこれは後と関係ありますが、学生運動やりましてね。61年から69年までの、60年代の学生運動もしくは政治運動の問題は今なお言えないことがたくさんありますので、まあこれ以上追わないでください (笑)。

要するに、学生運動やって、勉強するための道をはるか遠回りばかりをしていて、ろくに勉強しないまま駒場が終わっちゃった。ただ読みたい本はたくさんあって、ようやく読めるようになっていました。高度成長に入っていましたので、中学高校時代よりは本も買えるようになってましたのでね。今とは雲泥の差ではあるけれども、本を読めるようになった、二十歳前後の学生でもちょっとアルバイトをすれば本を買えるようになったという、なんていうかな、楽しさ、おもしろさというのを当時実感しましたね。

**クリオ：** その後は哲学科に進まれたのですか、最初は？

**樺山：** 正確にはね、当時はまだ学科制度で、駒場から進学するときにはもちろん進学振り分けがありましてどこかに入らなければいけないのですけれども、定員制度ではなかったんです。心理学とか、社会学もそうかな、ごく特定のところだけはあふれてしまうので上限定員が決まっていたんですが、それ以外はどこでも入れたんです。それで僕は西洋史に来ましたけども、進学した一年目、つまり三年生の時に両方のゼミをとってあれば二年目どちらにでも移ることができたんですね。今でも転専修課程というのでできますが、ただ進学振り分けの時の点数の問題があるから今は上限定数を決めているので、どこへでも自由に転専修課程か転学科することはできないけれども、当時はごく例外を除いてはどこでも行けたんですよ。で、僕はここに来た時に、西洋史でも哲学でも卒業できるような単位の取り方をした、別の言い方をすると、演習と必修単位とは両方とったんです。まあ、どっちでもいいなと思っていたんですが。

**クリオ：** 進路として、西洋史を選ぶか、哲学を選ぶか、ということで悩まれたというご経験はなかったのですか？

**樺山：** ろくに悩んでないんだけどね (笑)。西洋史と哲学のどちらでもよかったんですが、さっき言ったようにできれば外国に行けるという配慮考慮もあったと思います。まあ今から考えればおかしいですよ、何やったら外国に行けるかだなんてね (笑)。それからそれまで読んできたものの延長上で、哲学と歴史にまたがるぐらいの領域で、で

できれば外国に行ける、行けなくともこれまで自分が関心を持ってきた日本社会であるとか、あるいは東アジア社会とか、こんなぐらいのことを扱えばいいぐらいに考えていたのだと思うんですね。

クリオ：先生が西洋史に進学なさった時には、スタッフとしてはどういう方々がいらっしたのですか。

樺山：村川聖太郎先生が定年の五年前ぐらいだったと思います。それから林健太郎先生と堀米庸三先生は同い年ですけれども、その何年か下でおいでになって、まだその二人は僕が入った時には五十歳をちょっと超えたぐらいだったと思いますね。柴田三千雄先生はフランスに在外研究で二年おいでになったので、僕は学部では直接教わっていません。帰られた時には、僕はもう大学院に入っていました。年長の三先生は、いかにも「帝国大学」の先生でした（笑）。

クリオ：それは当時の率直な印象だったのでしょうか？

樺山：はいはいはい。今でもそう思っています（笑）。三揃いの背広というか、堀米先生は当時から「ダンディ」と言われていたけれども、まあでも今のダンディとはわけが違いますから。いかにも昔の先生でしたし、なんていうかライフスタイルというかビヘイビアがやはり帝国大学の先生だなと思いましたね。ついでながら、のちの柴田先生からは東京大学の先生、つまり「東大教授」になった。昔は帝大教授だった、いうならばね。

クリオ：なるほど。

樺山：資格上、身分上は別として、城戸先生までは東大教授で、私からただの「教授」になったんです（笑）。もう、どこにでもいるような教授とってみんなて笑うんですが（笑）。

クリオ：当時の講義の内容であるとか、ゼミで使っていたテキストがどのようなものだったかというのは覚えてらっしゃいますか。

樺山：記憶違いがあるかもしれないのですが、村川先生は「古代ギリシアポリスの諸問題」という講義で、これはとてもおもしろかったです。ほとんどメモ 1 枚ぐらいしか持ってこられなくて、したがってときにどこにとんでいかかわからない講義でもあったけれども、学問ってこうやって傍証を固めながらやっていくのかなという感じの名講義だったと思うな。林先生は「ワイマール共和国史」で、後に中公新書になったもののノート講義でした。堀米先生は「12 世紀の諸問題」だったと思うんだけど、これは結局ご本人、まとまった形ではどこにも書かれなかったけど。柴田さんがおいでにならなかったわけだから、かわりにみえていたのは井上幸治さんと、「フランス革命の諸問題」だったと思います。これはね、何いってるかさっぱりわかんない（笑）。あの、面と向かって話してもよくわからない人なんだけれども（笑）、講義でも全然わかんないんですよ（笑）。ただもう本人一生懸命でね、熱っぽく黒板中にフランス語を書きまくってね、書くところがなくなると、なんか狭いところにごちゃごちゃごちゃって書くもんだからノートとるのが大変で（笑）。

というようなことがありましたが、それでも僕は哲学をどうやって勉強しようかという多少の戦略は自分で持っていたつもりで、ギリシャ哲学を勉強しようかなとまずはじめに思いました。それで、これは当時一緒だった木村靖二が今でもよく言いますけれども、「樺山がギリシャ語を勉強していたので一緒に出てみたけれども難しくてわかんなかったんで、樺山に買ったばかりのギリシャ語のインターミディエイト（オックスフォード版ギリシア語中辞典）をくれてやったんだ」と（笑）。確かにもらったのはそうで今でも使っていますけれども（笑）。哲学は、ギリシア古代哲学を勉強するか、もしくはやるとしたらドイツ観念論かなと思っていました。斎藤忍随先生という古代哲学の方がおいでになって、その斎藤先生のゼミに行きましたら、今でもたぶんあそこはそうだと思うのだけれども、大学院と共通ゼミなんですよ。テキストはプラトンの『テアイテトス』でした。この『テアイテトス』、日本語になるとわりと

わかりやすいような気がするのだけれども、プラトンのギリシャ語って難しいんですよ。駒場でちょっと文法を勉強した程度じゃまるつきり歯が立たないし、何年もいる古手の大学院生がごろごろいるわけでしょ（笑）。学部三年生になんかろくに回ってこないし、時々「樺山君、この一行訳してごらん」なんてね（笑）。それが一年に何回あるかという程度でした。あれ、僕は事情を知らずにプラトンからギリシャ語のテキストを読みはじめたのが間違っていたと思うな（笑）。アリストテレスから始めたらまるつきり違ったと思いますね。

クリオ： そのアリストテレスとの出会いというのは、もう少し後のことだったのでしょうか？

樺山： はい、はるか後になって。ギリシャ語のテキストを読んだのは『ゴシック世界』を書く時です（笑）。その後日本でもアリストテレスの全集が出て、読むとあの人は偉い人だなと思いますけどね。あの思弁哲学者が同時に、イオニア海岸で観察して、「鯨は魚ではない」ということを見つけたわけだから。まああの人は理性的というよりはむしろ悟性的な人で、つまり事実の認識を積み上げていく人で、プラトンにくらべればずっと平易ともいえるし、ちょっと流麗さに欠けるというのかな、だからその分だけテキストが読みやすいんだと思うんだけど。

ごく最近日下部吉信さんという人が「語る構造主義者アリストテレス」という文章を書いていてこの前読んでいたら、アリストテレスはプラトンにくらべればはるかに田舎っぺだから、ああいう誰でも分かる議論をしたんだと（笑）。アテナイの市民たちは、プラトンのあの何言ってるんだかわからない産婆術だとか弁証法だとかに惑わされていることを楽しんでいたのであって、それにくらべればあのアレクサンドロスの家庭教師の方はただただアルカイック田舎っぺであった、と書いてあって、なるほどと思ったんだけどね（笑）。アリストテレスからやりそこなったもんだからそれでお手上げになっちゃって、哲学をやめました（笑）。

クリオ： そうなんですか。きわめて現実的な理由なんですね（笑）。

樺山： 観念論哲学もね、もちろんヘーゲルから読んだんです。ヘーゲルって最近の長谷川宏さんの訳で読むといかにも読みやすいし、あの当時のふつうのドイツ語なんですよ。あれを学者の日本語に訳すととたんに難しくなっちゃって何のことかわからなくなるし、当時あった訳がまたみんな悪かったと思うなあ。漢文の読み下しみたいな訳だもんね（笑）。ということで、これも間違えちゃったと思うんで、カントから読みはじめたら続けてやっていたかもしれないですね（笑）。

クリオ： それでは、すべて出発点を間違えてしまったという・・・。

樺山： みんな踏み間違えちゃってね（笑）。それこそ構造主義以後「カント哲学の復権」ということで、僕もあらためてカントを読み直してみたことがあるけれども、きわめて悟性的ですよ。あの人もああいう晩成の哲学者ですから一步一步積み上げていって、『純粹理性批判』なんて第二版でもあんなに増補するぐらいに。どこで終わってもいいような議論なんだけれども、一つ一つは積み上げていっているから真面目に考えればわかる。でもヘーゲルって真面目に考えるとますますわからなくなるんだよね（笑）。それでそこでも間違えちゃって、結局二年間ゼミもとりましたし、今風にいうと「類卒」といわれる特別演習で出る資格まであったけども、哲学は出ませんでした。それでまあ西洋史に戻ったというか、西洋史そのもので大学を卒業することになったんです。

### 進路決定と卒業論文

クリオ： そうして学部を終わるにあたり、就職するのか、職業としての歴史研究者という道を歩むのかということでお悩みになったという話をお聞きしたことがあるのですが。

樺山： はい（笑）。自分自身の力についての自己認識からしても、まわりで見ているような研究者として学問が成り立っていくだろうとはとても思っていませんでした。今モラト

リアムっていうけども、私もモラトリアムで、学生運動やったりしてろくに勉強しなかったから、もう少し勉強するチャンスが、エクステンションがあればと考えまして、留年するのもいいが大学院行く人もいるから、じゃあ、という比較的軽い気持ちだったんです。でも当時は、大学、たとえば文学部と社会の特定の部署との間のつながりが今と比べてはるかに強かったんです。新聞とか、まだテレビという時代では必ずしもなかったけど、報道ないしは出版、あるいは研究施設とかいうところで比較的学問に近い仕事ができればなあということも考えていました。別に僕だけじゃなくて、その当時はそういう選択を自分に課して、両方考えながら結局どっちかを選んだという人がかなり多かったんだと思うんですよ。

そんなわけで、中央公論社の就職試験を受けて、今風に言うと「内定通知」をもらったんです。でもあらためて考えてみると、のっけから給料はもらえるかわりに働かなきゃいけない、これも辛いなどと思って（笑）、なんかグジュグジュ考えた末に断わりに行ったんです。今であれば灰皿が二つ三つ飛んできて、コーヒーをかけられるところですが（笑）。そのときに人事部長とかではなくて、たまたまそこにいた編集者が話を聞いてくれたんです。僕も平身低頭、「いろいろ考えた末に」って言ったら、「まあわかった。そのかわりお詫びのしるしにちゃんと勉強しろよ」と言われました（笑）。

「はい、かならずおっしやるとおりにします。ご恩は忘れません」なんて言ってね（笑）。今はみんなそういうふうに言うそうなんだけれども（笑）、それで許してもらったんです。その時の編集者が今では評論家をされている粕谷一希さんという当時『中央公論』の編集長で、名編集長として知られた方ですが、その後粕谷さんはなぜかそのことをずっと覚えていてどこかに書いています。でも僕はその後、中央公論のために本も書きましたし（笑）。

クリオ：そうですね、「恩返し」を（笑）。

樺山：はい（笑）。かなりのベストセラーも書かせていただいているので、まあ恩返ししたと思いますよ（笑）。

クリオ：そしてそのアカデミズムへの第一歩となったのがおそらく卒業論文であったと思われるのですが、卒業論文のテーマはどのようなものだったのですか。

樺山：「パドヴァのマルシリウスの政治思想」というんですよ。結局そのことをもろに使った論文は書かなかったんですが、後の『ゴシック世界の思想像』のなかに入ったとか、旧版の岩波講座『世界歴史』のなかにも書いた論文にそのエッセンスは入ってます。今でもこういうことやる人あんまり多くないけれども当時もちろんいなかったもので、「こんなことで大丈夫か」と言って堀米先生にもだいぶん脅かしを受けまして（笑）。たまたまあれはラテン語テキストもドイツ語訳も手許にあったので、一冊テキストを読めばなんとか書けるかなというつもりで選んだんです。これは選んだ時点では特別な配慮があってやったわけではないけれども、結果としてはそこが出発点になったことには違いないですね。

クリオ：そもそも歴史学のなかで、中世史へと関心が収斂してきたのはどうしてなのでしょう？

樺山：それもなんだかよくわからないんです（笑）。

クリオ：外国に行けそうだったから（笑）？

樺山：外国、外国（笑）。それはあります、確かに。さっき言ったようにプラトン哲学を読みましたので古代ギリシャ史でもよかったんですけど、村川先生の授業を聞いてみると、あれは大変だなと、とても僕じゃあ届かないなと思った。堀米先生の「12世紀の諸問題」はかなり刺激的だったし、いずれかという問題の深みというよりは問題の広がりの方を伝達しようという趣旨だったと思います。それは僕だけでもなくて、木村君その他のその講義を聴講した人たちは同じような印象を持っていると思うんですよ。

それでまあ中世でなくとももちろんよくて、さっきの観念論哲学のカントやヘーゲルの時代でもいいかなと、それもいろいろ迷ったこともありました。フィヒテも読ん

で、ナポレオン時代のフィヒテというのもいっぺん議論したいなと考えていました。いうならばゲーテからフィヒテへという、18世紀から19世紀のドイツ思想を論じたいと思ったこともあって少し読んだのですが、とても大学四年生には手に負えないなと思いました。ただずっと後になって、ついこの前10巻本の『ペーターベン全集』に「エロイカの世紀」というタイトルでその時代のことを連載しました。35年ぶりに果たしたという感じです。

要するに浪人している時にドイツ語を勉強して、その後ヘーゲルも読んだためです。そののち事情も変わりましたが、その当時は英語とドイツ語しか本格的には使えなかったのが、ドイツ語で処理ができるという言葉の制約がありましたね。ついであるがら駒場でその当時勉強できる外国語は7つしかなかったんですよ。まだスペイン語は第三外国語で、イタリア語は第三外国語でもなかった。中国語は第二外国語でもあったけれども、韓国朝鮮語は第三でもなかった。ラテン語・ギリシャ語の初級文法はありましたし、それからロシア語がありました。という事情で7つしかなかったのですが、今は23あるそうです。この前東大の広報誌の座談会でその話をしたのですが、23の言葉をその気があれば勉強できる(笑)。勉強したって身につかないに決まってるけれども(笑)、今こういうグローバル化した世界ですから、大学はそういう勉強チャンスを与える義務があると思っています。

## Section 2: 「ゴシック世界」への道: 「知と政治」をめぐる

### 大学院時代

**クリオ:** 歴史研究者としての土台作りとして大学院時代があると思うのですが、先生が大学院に進まれた1965年当時の西洋史学は、戦後の人文社会科学を支配してきた「戦後史学」に衰退の兆しが見えはじめたとはいえ、依然として大塚史学やマルクシズムを軸として展開したように思われます。しかしそうした潮流からは一見大きくはずれる形で先生のご関心は中世後期における「知と政治」すなわち「ゴシック世界」へと向かっていったように思われます。そのプロセスをふまえた上で、当時の大学院時代のお話をうかがいたいと思います。

**禰山:** いわゆる大塚史学は5巻本の『西洋経済史講座』で曲がり角に立ったと言いますけれども、今考えてみますと実際にはそのテンポは分野によって異なりますし、60年代までそういう発想で仕事をされていた方はたくさんいます。これも個人よりは時代を論じるほうが先だと思うのですが、高度成長の時代であった60年代は、60年の「U2事件」、61年の「ベルリンの壁」と、その少し後になるけれど「キューバ危機」のように、場合によってはいつでも熱くなる時代であった50年代とは違って、いずれも文字通り冷戦らしい東西対立という国際関係の中に置かれていました。あるいは60年の安保をくぐったあとの市民社会の条件が大きく転換してきている、あるいは56年のスターリン批判以後の事情変化によって中国その他が台頭してきたように、少なくとも統合的なマルクス主義はあり得ない、というような状況もありましたので、すでに史的唯物論や大塚史学でなくとも歴史にはいろいろな論じ方があるということの共通の了解、とまでは言いませんが、予感をみんな持ち始めていたと思います。

ここの西洋史の研究室は小さい集団ではありますが、いわゆる大塚史学というものをまともに自分で引き取った人たちというのはその後ほとんどいません。柴田三千雄さんは大塚史学と個人的に接触の強かった方ですが、その他柴田さんの後継者たちである遅塚さんとか二宮さんもふくめて、大塚史学というよりは「高橋史学」です。高橋さんとは幾度もご一緒させていただいていろいろ教えられるところはありません。



したが、もう高橋さん自身も、大塚史学というか比較社会経済史学はオールマイティではないという認識を持ち始めていたと思います。だから僕にとっては大塚史学を選ぶかどうかというそう逼迫した選択だったという気はしていません。それぞれ自分の知的な形成の結果として一番アプローチしやすいやり方を選べばよいと考えていました。学部の同級であった木村靖二君と黒川康君がナチスを含む 20 世紀ドイツ史を選んだのは、これは丸山真男さんのインパクトです。それでも丸山さんのように日本ファシズムを無責任体制と説く、どちらかというと天からボールを投げるような解き方ではない、もっと政治過程に即した解き方が可能であると考えたに違いないから、60 年代の私たちにとっては、選択はそんなに窮屈ではないなと思っていたと思います。

クリオ：先生が『現代思想』での柄谷行人氏と長尾龍一氏との鼎談の中で、『近代日本思想史講座』という丸山真男氏が関わった本をむさぼり読んだということが書かれてあって、それに対して大塚史学の総決算として先ほど名前が挙がった『講座』はあまり読まなかったとありますが（笑）。

樺山：どちらもあまり読まなかった（笑）。どちらに関心を持ったかということ、丸山さんたちの・・・。

クリオ：お三方に共通していたのは、そうした戦後第一世代のメッセージをある種の違和感を持って受け止めていたということのようですが。

樺山：はい。ただし筑摩版の『近代日本思想史講座』は、丸山さんの第二巻が出なかったんですよ。その巻は最後まで期待されながら出なかったの、あれがでていたら事情はまたちょっと違ったかもしれません。その『講座』はいわゆる戦後民主主義を受け取った人たちの仕事でそれなりの完結性はありましたが、それはさっき言った高度成長、日本市民社会の特定の形での成熟、冷戦というような 60 年代の社会現実を解決できていないと思いました。これは柄谷さん最近でも言っていますが。

ただ丸山先生にはそのこととは別に、僕はたいへん多くの学恩があると思っています。先生の授業、面白かったです。あの方は僕が学生としてここに来た 63 年にはプリンストンに行っておられて日本にいらっしやいませんでした。この訪米はアメリカにおける日本研究にとっては、実は決定的なターニング・ポイントで、猛烈な衝撃がむこうにはあった。64 年に帰ってみえて、その 4 月から法学部の「東洋政治思想」の講義をはじめられて、ちょっと体をこわされたあと、学園紛争になって途中でとぎれてしまいましたけれども、僕は今出版されている講義録の一回目を聴いたんですよ。多少とも中国古典に子供の頃から接していたということもあって、こういうコンテキストはこういう文脈で読めるということも中国についても日本についても解き明かす手法というのは、これは凄いなと、こういうふうにやらなければならないのかなと思いました。その後も丸山先生には幾度もお目にかかったし、『ゴシック世界』に対する批判もいただいて大変勉強になりました。大塚先生はちょっと前に行って話すのも気が重いという気がするのですが（笑）、丸山さんは話し始めると止まらない人ですから、お宅にも呼んで頂いたり、いろいろな本も貸していただいて、大変学恩があります。

クリオ：西洋史の大学院に進学されて、学部時代の講義やゼミと決定的に違うものはありましたか。

樺山：中世史ですので堀米先生のゼミですが、ごろごろと、と言っちゃいけないんですけども（笑）、のちに偉くなった先生で、当時はまだ偉い大学院生に過ぎない方々がたくさんいます。堀越孝一さん、城戸毅さん、もうとつと北大を退官されましたけれども木村豊さん、それからあの赤沢計真さんという名物先生いるでしょ、そして鹿子木幹雄さんかな。私からすると一回りも上くらいの偉い大学院生がたくさんいて、ろくに勉強もしてこなかった修士一年生とは格段の差なんです（笑）。まるっきり子供扱いで、ラテン語のテキストなんて「どう、そこ読んでごらんさい」なんてね。こういうところでこういう人たちの後を追いかけて研究者になれるのかなと、もう暗澹

たる思いでしたね。

クリオ：それは今でもそうですね。やはり修士に入ったばかりのときには、天高くそびえる偉い先輩方が・・・。

樺山：たとえば千葉君みたいなのが（笑）。

クリオ：いえいえ（笑）。僕のときは僕のときで有光秀行さんや山本史子さんがそうだったんですが、その種の「衝撃」があつてはじめて、しっかりやらなければと気を引き締めるという・・・。

樺山：刺激にもなるが絶望感にも襲われるという（笑）。今でもそうですけれども、その刺激なり絶望感なりを上手に超えられなかった人ももちろんいますよね。それはあまりに敏感に過ぎたのかもしれないので、なんだか鈍感に受け止めた方がいいという気がしなくもないのだけれども。当然経験も知見も違うから差があるのはやむを得ないね。でもまあそれなりに座敷牢の牢名主がいるのも悪くはないね（笑）。

クリオ：その頃になると柴田三千雄先生がフランスから帰朝なされていたと思われませんが、柴田先生の講義やゼミにも参加されたのですか。

樺山：先に述べましたように、僕は学部ゼミ・学部講義は聴いてないんです。柴田さんはその後同僚としてずっと働いたからわかるんですが、無愛想な人でしてね（笑）。できない子は相手にしてくれない。それで僕なんかは全然相手にしてくれなかったなあ。（京大から）帰ってきて同僚として働いてみると、それはそれなりになるほどというところはありますけれども、学生としてみるとどうやってつきあったらよいか、つきあい方の難しい先生でしたね。さらにその向こうには高橋幸八郎さんがいる（笑）。この人は柴田三千雄さんに比べればずっとつきあいやすい人で、しょっちゅうお酒飲んで、人のこと言えないですが（笑）、修士課程ぐらいの学生を飲み連れて行って。行くともうね、学問の話とかしてないの。「ねーちゃん、ねーちゃん」とか言ってね（爆笑）。ただまあ、この先生方とそういう形でつきあったので、結果としていろいろとつきあい方もおぼえましたが、あの高橋史学の、あの高橋幸八郎さんを、今ここにいる現実の高橋さんとだぶらせるのにだいぶん努力もいったけどね（笑）。

クリオ：そのような環境のなかで、やがて結実する「ゴシック世界」というテーマへはどのような経緯で向かわれていったのでしょうか。

樺山：学問をするのに回り道しましたし、大学終わるまでは学生運動に関与していたものから、なかなかテーマへの接近の仕方を十分に会得できなくて、たいへん苦勞しました。たとえばフランス革命史のように、一定のステップを踏んでいけばどこかに結論が見えてくるだろうという見通しのある分野ではないんですよ。少し専門的な話になって恐縮だけれども、当時日本ではかの「国王自由人学説」の議論の真っ只中だったんです。それで「国王自由人学説」を実質的に日本に持ち込んだ直居淳さんに（当時助手でいられて、そのあと北大に移られて若くして亡くなりましたけれども）、「いまや「国王自由人学説」でなければ夜も日も明けない。ドイツに行ったらみんな国王自由人だ」と言ってさかんに煽られました。そんなはずないんだけどね（笑）。そのほかにも石川武さんとか、法学部の久保正幡さんとか。久保さんのゼミは紛争になる直前まで四年間くらい出席していました。

クリオ：久保先生のゼミでは、当時どういうことをされていたのでしょうか。

樺山：当時はカラッソという法制史家の、イタリア語の中世ローマ法入門書を講読していました。この久保さんは「国王自由人学説」ではありませんが、ただ創文社から出た『中世における自由と国家』の編者になっています。だから「国王自由人学説の再検討」とでもいう生意気な論文でも書けばあちこちから教えてもいただけたらうし、くさされもしただらうけど（笑）。そこを政治思想というものに持っていったのは、やはり当時の政治に対する理解なり関心なり、そういう磁場があつたと思います。それはさっきの筑摩版の『近代日本思想史講座』もそうですし、丸山先生もそうですし、今と

違ってその頃の私たちが持っていた「政治」という言葉の意味の強烈さを離れられていなかったんでしょう。マルシリウスを読んだのも、たぶんそういうことだったのかなと思います。

今でこそ条件は変わってきたけれども、当時もちろん『ゴシック世界』の前半部分になっているああいう仕事をやるのはとても大変でした。こういう発想で書けたらというヨーロッパ語で書かれてこういう発想で書けたらというのが無くはなかったのですが、日本にはほとんどどこにも概説書はないし、どこに向かっていったらいいのかという方向付けなしでこの問題に入ったようなものでした。そのためにもとめ上げるのには大変時間がかかって、二年でできなくて三年かかったんです。ともかく三年で何とかキャッチ・アップできたなという感じがします。

それでこれを考えているうちに、今はと気がついたのですが、大きな転換点があったとすれば、1964年に、したがって僕が大学四年生だった昭和39年ですけれども、東京オリンピックがあつて新幹線が走った年に、為替自由化になったんです。それでわれわれが個人で本を自分で送金して買うことができるようになったんです。本はそれ以前から書店をとせば買えたけれども、マイクロフィルムは自分で手配しなきゃいけないので、それまではできなかった。向こうにいる人に撮ってもらうか自分で行って撮ってくるかのどちらかだったんです。自分で行くことなんてとてもできませんでしたが、どこかの図書館でマイクロフィルムを撮れるということを誰かが発見しましてね。

クリオ：それはまさに画期的だったわけですね。

樺山：画期的ですよ。もっとも今考えればそれが無ければもっと楽で、「残念ながら本邦では入手不可能である」と書けば済んだんだけどね（笑）。為替自由化は昭和39年4月ですけれども、実際にそれができるということがわかって、われわれが手紙を書いて、銀行に行つて小切手を作り、小切手送金措置をとれるようになったのは1965年か66年くらいからだと思います。そうやってみれば日本でほとんど手に入らないけれども、ヨーロッパから取れる。そして当時は議会図書館を含めてアメリカの大学図書館が非常に親切にしてくれました。

これも後ほどどこかに書きましたけれども、私の場合は、東ドイツのライプチヒの図書館が非常に親切にしてくれて18世紀のエディションまで探してくれました。マイクロフィルムで送ってくれるのだけれども、当時の東ドイツのことですからフィルムは暗くて露出が悪く、ろくに読めないんですよ。おまけにその頃は東ドイツにはお金を送れないんです。そのかわりに日本史関係の書籍や文献目録のような公的出版物を指定してきて、それを送ってくれと言うんです。向こうも不自由してんだなと思いました（笑）。のちにライプチヒに行つて図書館でその話をしたら、「たぶんどこかにお前の送った本はあるはずだ、ありがとう」とか言われてね（笑）。

そういう現実的な条件の変化というのは、私に限らず当時勉強しはじめた人間にとっては大きかったです。もちろん留学している人たちにはお願いすることは可能だけれど、でも隣の黄色い後輩が先輩に向かってあの本とあの本を送れなんて（笑）。そもそもゼロックス・コピーはすでにあつたけれども、きわめて高価で、一枚40円くらいだったのでしょうか。当時の40円ですから今なら400円以上だと思います。というような「手段上の変革」が起こったものですから、その気になれば日本で使われたことのないテクニカルなテキストを読めるという見通しができて、それであの修士論文は書けたと思います。

クリオ：それは後に『史学雑誌』に上・下で掲載される論文ですね

樺山：はい。あれは修士論文なんですけれども、180枚あるんですよ。今そんなことは史学会理事長としてはとても認められないんだけどね（笑）。上限は80枚って言うんだから、今、あれは要するに学園紛争後、『史学雑誌』の月刊を続けていくためには

原稿が足りなかったの、なんでもいいからたくさん書いてくれって言われたんです(笑)。

修士論文は結局三年かけて書いたんですが、今考えてみると、それ以前には日本でこんなことができるはずもなかったんですが、それが可能になったのは、先ほど述べましたように文献が入手できるようになったという現実上の条件改善が一つあります。もう一つ、日本でアドバイスを請うても誰もしてくれなかったんですが、それまで少し勉強した概念ツールを使ってみると、あれもこれも説明できるかなという感じがありました。のちに丸山真男さんとミシェル・フーコーを使っているなといろいろな人に言われました。丸山さんに関してはそんな感じはしてないのですが、ミシェル・フーコーは間違いなくそうです。フーコーを中世に読み替えたならこう使えるかもしれない、思想史概念を自分なりに置き換えてみればこうなるかなと考えたのです。結果として今見れば恥ずかしい限りなんですが、当時としては日本でこういう議論ができるんだという自信がついたというんでしょうか。あれはもともと修士論文をもとにしているのですが、本来は500枚あるんです。

クリオ： えっ(驚)。

樺山： それを180枚に縮めているから無理があるんです。いま機械で書いたら500枚って積み重ねていけばいいんだけど、手書き500枚って大変ですよ。当時友人たちにも言われましたが、今の大学院に当てはめてみれば、博士課程へ入ったあとに細部を整備すれば課程博士論文になったと思います。当時課程博士論文なんて考えもしなかったし、そもそもそういう制度があったのかなあと感じでした。まるっきりそんなこと念頭にありませんから、雑誌論文に縮めまして、その時切り落とした部分はなぜか今でも使っていません。もったいないなあと思っているのだけれども。

クリオ： 「知と政治」という問題関心が具体的なプロセスを経て結実していくのは京都人文研時代になるのですが、その個々の論文を外に向かって明確に配置なされたのが、1974年に『思想』に掲載された「ゴシック世界の思想像」ではないかと思われます。そこで纏められた「三極構造」というコンセプトは、どのように形成されていったのでしょうか。

樺山： 人文研に行って、あとで本にもなりましたけれど「異端運動の研究」という共同研究をやったんです。その時自由心霊派を扱った大きい論文を書きましたけれども、そういう作業をしながらということです。レグヌム・ストゥディウム・サケルドティウムというあの三極構造は、これはなにもぼくが発見したわけではなくて、13世紀にすでに……。

クリオ： アレクサンダー・フォン・ロエスが……。

樺山： そう。同じことは14世紀にもいろいろ言われていて新しいことでも何でもないのですが、これを論じることで思想のシステムに載せることができるなという見通しはその頃に気がついたんです。これはやはりミシェル・フーコーですね。フーコーの翻訳はその直前くらいからはじまっていたし、いくつかフランス語テキストを読みました。かなり難しくて手に負えないけれども、一番基本になったのは『言葉と物』です。あれは読んだときには頭を叩かれるほど驚きました。こういう思想史の読み方が可能なのだということを直感しましてね。もちろんそのまま使えるわけではないけれども、中世思想の配置図を従来とはかなり違った形でできるのだと思い始めたのは、70年代のはじめです。

クリオ： 1980年に先生は『現代思想』の臨時増刊「学問のすすめ」の中で、「歴史学の現在」というタイトルでインタビューを受けていらっしゃいます。そのなかでこれから自分がやりたいことということで、展望を述べられているのですが、そこに「三つのエクリチュール」ということが書かれていて、一つは、ある特定の地域のある特定の断面図においてその全体(トタリテ)を描くということ。これは当時出版間もない『カタロ

ニアへの眼』で達成されたことです。そしてそのもう一つというのが人物評伝で、生身の人間を通じてひとつの時代を描き出そうということ。これはのちに『パリとアヴィニオン』において実現されました。最後にもう一つ、一つの事件を全体として描きたい、ということがあったのですが、これはどうなったのでしょうか？

樺山：できてないな（笑）。確かそれはどこかでできることならばとって、1282年のシシリアン・ヴェスパーズのことを書いたと思います（「コスモス・隠喩・できごと」）。地中海政治システムのなかで「夕べの祈り」事件を書きたいと思ひまして、70年代の後ろから80年代にかけて多少準備もして授業でも一度話をしたことがあるような気がするのですが、なんか実らなくて申し訳ないのだけれども。でも予告してできてないことは、ほかにたくさんあります（笑）。

クリオ：それからもう一つ、「コスモス・隠喩・できごと」のなかで、森羅万象の出来事は、これまでのメカニクな因果律による説明ではなく、メタフォリックな説明が可能ではないか、ということも書かれています。

樺山：そんなことを考えはじめたのはもちろんヘイドン・ホワイトのインパクトです。その後、また話に出るルゴフさんと会っているいろんなことを考えたんですけども、システムなりメタファーなりそういうなかで歴史を論ずると。言うのは簡単だけれども、具体的な事件を扱うのが歴史家の任務だから、できればシシリアン・ヴェスパーズでこの議論ができればと考えたのは確かです。できてないんですけどね。

クリオ：その辺のお話はルゴフの段で詳しくお聞きできれば、と思います

### Section 3：学際性と現場——京都人文研時代

#### 京都人文研時代

クリオ：さて、1969年4月、先生は京都大学人文科学研究所に助手として赴任されまして、1970年代前半をそこで過ごされます。この時期に、一方では今お話しされた『ゴシック世界』の完成に向けて進まれながら、他方では人文研ならではの体験、たとえば他分野の研究者との出会いであるとか、カタロニアやアンデスその他での現地調査の体験をつうじて、先生のなかに新たな局面、問題関心の方向が生まれてきたように思われます。ここではそうした調査体験や学際的交流の具体相と、それらが歴史研究者としての先生にどのような影響を及ぼしたのか、ということを経験談を交えてお話いただけたらと思います。

樺山：当時の人文研が戦後日本の学問の一つのトポスであったことは間違いなくて、69年の12月に行ったときは、桑原武夫先生は定年退官されていてあまり会にも見えなかったのですが、いわゆる「京都学派」といわれる方々は、まだ人文研かその周辺にごろごろしておられました。河野健二さんや会田雄次さん、ぼくはその会田雄次さんの助手ですけども、学問的には何の教えも受けていません（笑）。ほかにも上山春平さんや林屋辰三郎さん、当時まだ50代初めだった梅棹忠夫さん、その先生の今西錦司さんと、こういう方々がたくさんおられた。もちろんそのもとで若い助手にいたる研究者たちが、それこそ十何百とごろごろしていました。私たちは若いからほとんど徹夜で仕事場にいたり徹夜で酒を飲んだり、それを六年半ほどやりまして、すっかり暮らしも何もめちゃくちゃになりました（笑）。これがなければもっと中世史家としてまっとうに積み上げてきたんだと思うのですが（笑）。ここで外国にも行かせていただきました。

クリオ：念願の外国ですね（笑）。

樺山：そう。そのことはのちに山口昌男さんと掛け合いで話したか、書いたことがあります。

山口さんは、ご承知だと思うけれども、ここの日本史出身です。そのあと都立大学の人類学を出られて、ICUに行かれたのですが、職がなくてナイジェリアに直接行かれて、人類学のフィールドと日本関連の民族学の講義をしながら勉強した方で、したがっていわゆる留学をしていません。人類学者、とくに文化人類学者の多くはアメリカに留学した方が多いし、その他でも多かれ少なかれ留学体験をしてそこで人類学の手ほどきを受けたのに、自分は留学をしていない、そのために英語が下手だと言っていますが、ほんとに下手なんです、そのかわりよく喋るけれども（笑）。ただそれは自分にとってデメリットであるけれどもメリットでもある、つまりいかなる国にも魂をとられなかったというんですね。今でこそ世界中どこでも留学はあるけれども、当時はアメリカ合衆国かヨーロッパの三ヶ国かです。だからそこに行つてちゃんと勉強してきたか、むこうがちゃんと相手にしてくれたかは別にしても、その国のアカデミーの現場を見てその国の言葉を勉強して、うまい下手は別としてその国の言葉でむこうの人間と議論をできるようにして帰つて来るというのが、通常の日本の人文系研究者の道であつたのに、自分はしてない、と。

ぼくもしてないんです。それはしたくなかつたからというのではなくて、間が悪かつたというんでしょうか。そろそろどこかへ行きたいなあと思っているうちに学園紛争がはじまりまして、ぼくもそこまでは政治にコミットしていたものだから、そちらの方に一生懸命でした。それが終わった時に人文研へ行きて、さあこれから外国へ行こうかなと思つたときにすぐに行けたんです。でもこれは留学ではありません。京大人文研は「京大探検部」の系譜を引いているところですが、梅棹忠夫さんがあるとき研究室でヨーロッパ探検をやるんだと言ひましてね。ヨーロッパと探検して普通つながらないんだけど（笑）、ニューギニアだとかケニアだとかじゃなくて「ヨーロッパ探検」をやるんだと。ぼくが行つた年にはじめて「ヨーロッパ探検隊」——梅棹さんはそう呼んでおられたけれども——がありまして、ぼくはその第二次に入れてもらいました。机に大きな地図を広げて、さあヨーロッパだ、どこへでも行つてこいと、ヨーロッパの中だぞ、でも都会は駄目だぞとね。「パリやロンドンやオックスフォードのようにわれわれが知っているような都会はだめだ、そうじゃなかつたらどこでもいい。お金は文部省からとつてきてやるぞ」と。ぼくは72年にはじめてヨーロッパ探検で外に出させていただいたんだけど、その時10人近くの間が勝手にどこへでも行つてこいと言われまして。梅棹さんは乱暴で、「ここはどうだ、こっちはどうだ」と（笑）。たまたま梅棹さんの指があつたのがカタロニアでね（笑）。ぼくはたまたま大学でスペイン語を勉強したことがありまして一応スペイン語読めたものですから、スペインへ行きなさいという。

そういうことで「ヨーロッパ探検」に行つたために留学し損ないました。ちゃんとした外国の大学に行つてお師匠さんについて教えを受け、まじめにしかるべきカリキュラムをこなして、最終的にはPh.Dをとつて帰つてくるという、本来あるべき、今みなさんに勧めていることを自分ではできませんでした。自分ではできなくてその後苦労したからこそ、みんなには同じことをするなという主旨だと理解して欲しいのですが（笑）。結果言葉は下手ですし、どこかに本当の自分のお師匠さんがいるという感じもありません。勉強させていただいた方はたくさんあるけれども、山口さんと同じく、留学経験をもとにして学問を組み立てていないという後ろめたさも強く持っています。ともかく人文研の探検隊でろくな予備知識もないカタロニアへ行きて、行つてしばらくするまであそこがスペイン語圏でないということを知りませんでした（笑）。カタロニア語なんですよ。

京大時代の現地調査は外国では二つですが、国内でもいくつかやつたことありまして、それはとても勉強になりました。京都の北に北山がありまして、それは若狭湾に続いているんですけれども、ちょうどそのあいだくらいのところに美山町という村が

ありまして、林業をやっています。今でも北山杉という値段のいい杉を出しているところですよ。当時はまだ十分なコスト・ベネフィット関係がありましたので林業が盛んでした。その美山町に三年通いまして、木こりのおじさんに山に連れていってもらって木の見方とか林業が経済的にどうやって成り立つかということ、とことん教えられました。今ではすっかり忘れましたが、その当時であれば杉を見れば何年木かほとんど一二年の差で言えました。それは本で勉強しても駄目であって、木こりのおじさんに山に連れていってもらって見れば自ずからわかるようになります。この杉は何年木で一立米 27000 から 28000 円だと、もし筋がよければ 3 万円にいくだろうという具合に。あとからついて歩くんですが生意気に門前の小僧でして、そのうちわかってくるんですよ。のちに地域社会で皆さんといろいろかかわっていくときに、林業と同じくその時にやった農業調査というのはためになりました。今でも（青森県）田子の人たちとやっていますが、ああいう現場に出かけてみると、農作物今年はいいかどうかとか、築地市場の価格がどう動いたかとか、すぐ気になるんですよ。

それも京大人文研で鍛えられた話ですし、それから日本学をやらせていただいたのも京都時代です。子供時代から漢文読んでいたし、ここの大学院でも中国哲学（現在の中国思想文化）の大学院ゼミにずっと出席しておりまして、同期の池田知久さんと二人で漢文テキストを読んでいました。もちろんお荷物だけれども（笑）。安藤昌益の『自然真営道』は国史（現在の日本史）の尾藤正英先生の大学院ゼミで読みました。あれはのちに岩波版の『日本思想大系』にテキストとして入ったのですが、当時 1966,7 年の頃は刊行テキストがなかったんです。関東大震災でここが焼けたときにあらかた焼けて一部分だけが残っているのですけれども、今でも附属図書館に原本があります。それをマイクロフィルムに撮影し、それを焼き付けてテキストにする作業にぼくも立ち会いまして、だからぼくは『自然真営道』の原本をさわっています。写真にとって焼きつけてできたものからゼミで読むという作業に、二、三年つきあわせていただきました。当時はノーマンの『忘れられた思想家』に載っていた間接的な史料しかありませんでしたが、したがってノーマンもこのものを使ったんですよね。難しいテキストですが、ぼくその時にはじめて丸山先生に手ほどきを受けました。『自然真営道』を読んでいるんですけれども」と言ったら、「ノーマンの書き込みがあるでしょ」と言うんです。こんなとこに書き込んでいけないうんじやないかと思うんですが（笑）。そのノーマンがこの『自然真営道』を読むために丸山さんを訪ねてきたときの情景は有名で、ノーマンの本にも書いてあるし、丸山さんの本にも書いてあります。その原本があるわけで、日本史はともかく原本がある学問ですから、リアリティというものがないと感ぜられました。ですから人文研の日本学に加えてもらったときから、もちろん自分のお金で買える程度のもですが、江戸時代の和本を継続的に買って来ていまして、その一部は『ルネサンス周航』に入っている「養生論の文化」という論文で利用しました。こんなことやっていたから西洋中世史がろくに様にならなかったのです（笑）。

## Section 4： 歴史研究者から歴史家へ——東京大学時代

### 『現代思想』

クリオ：1976年4月、先生はその京都から母校である東京大学に助教授として移られます。それ以降、『現代思想』を主舞台とした、各分野の最先端を走る比較的年代の近い研究者たちとの対談や交流、近代歴史学批判の立場から現代歴史学構築への方法論的な発言、そしてこれまでの話にもあったような地域への積極的なコミットメント、そういった

活動が多極的かつ多面的、そしてなによりも膨大な量としてこなされていくこととなります。このセクションでは、歴史研究者という立場から「歴史家」への道程のなかで先生の歴史学が一斉に開花していくこの東京大学時代において、ターニング・ポイントとなった出来事や、先生の歴史学を構成する重要な問題軸についてお話しいただければと思います。まず最初に、1970年代後半において『現代思想』という場がどのような意味をもちえたのか、ということについてお話しいただけますか。

**樺山：**『現代思想』という雑誌は1973年に創刊されました。出発点はよくわからないのですが、ごく初期に今は評論家として立派に大成している三浦雅士君という編集者が青土社にいまして、彼が実質的にははじめた雑誌です。三浦君というのは、今はよく知られていますが、青森県弘前高校の出身で大学を出ておらず、独学で外国語も学んでその当時のいわゆる現代思想を自分で読みこんでいった、きわめて稀な編集者として、ある時この部屋を訪ねて来て、熱っぽく、いろんなことをやりたいのでいっしょに付き合ってくれないか、という話をしました。

さきほど比較的年齢が近いと言われましたが、近い人もいれば遠い人もいまして、京大時代に桑原・河野研究会の同僚だった今村仁司君は同い年です。生松敏三さんは早く亡くなったけれど、生松さんと木田元さんはほとんど一緒に、村上陽一郎さんは僕より七歳上、高階秀爾さん、伊東俊太郎さん他みんなずっと上でして、したがって僕は本当に嘴の黄色い駆け出しでした。34,5歳でしたから。

**クリオ：**先生が『現代思想』で紹介されるときには、いつも「新進気鋭の」という枕詞がついていますね。

**樺山：**はいはい（笑）。長い目で見るとやはり、60年代の学園紛争で、どことなく閉塞感のあった日本の知識人、思想家、あるいは研究者たちが、どこかに扉を開けて出るところが欲しいという感じを持っていたように思います。それは日本だけではなくたと思うので、フランスではもちろん構造主義の人たちが、サルトルさんは別としても、彼の周辺の人たちが依然として50年代から60年代のイデオロギーに拘わっていたことに対する違和感というか抵抗感を覚えて、68年5月のパリ（五月革命）をどこかで潜り抜けていきたいと思っていたでしょう。ドイツではフランクフルト学派の人たち、あるいは学問世界で言えばビーレフェルト学派の人たちが、同じように60年代にいったん扉が閉じてしまったものを通りぬけて行きたいと思っていましたし、多分それはアメリカのベトナム反戦の人たちも同じところがあったのでしょう。われわれも何かそういう苛立ち、というか、どこかに可能性が見えるという感覚を共有していましたね。

三浦君もまさしくそういう感覚を編集者として真っ先に表現しようとした人で、76年から80年ぐらいまだがあの雑誌のピークだと言われますけれど、どの号見ても出てくるメンバーはとっかえひっかえ同じです。同人誌みたいなものでね（笑）。三浦君にも本当に鍛えられまして、あれも読んでいないのか、これも読んでいないのかとどやされるし、今度樺山さん、これを読みなさいと言って、小林秀雄とか深沢七郎とかいろいろなものを持ってきました。それは僕だけではなかったと思います。すでに僕なんかよりはるかにエスタブリッシュメントに属していた中村雄二郎さんとか、僕と同い年でその時一緒だった栗本慎一郎とか。栗本とは僕はあっちこっちで一緒だね（笑）。

**クリオ：**この時期にお知り合いになられたのですか。

**樺山：**彼は明治（大学）に来る前が天理（大学）なので、京都では一緒でした。当時からああいう顔していて、真っ赤な背広なんか着てね（笑）。柄谷（行人）さんとか、それまでの学生運動その他で多少接点のあった人もいますが、このとき一緒になった人たちと確実な文脈なしに議論しているうちに分かったり分からなかったり、ついたり離れたり、というのを繰り返していたんです。それが70年代後半だったと思います。考えてみれば僕はまだ三十代半ばですからまともに相手にしてもらっているはずがないん



ですが・・・。

クリオ：でも本当に、『現代思想』のピークと言われているこの時期に、先生の対談なり論考なりが集中して発表されていますよね。

樺山：それはもう編集者としての三浦君の手腕としかいいようがないと思います。今、三浦君は新書館の実質上のオーナーです。

### アナール・インパクト

クリオ：アナール学派のインパクトがわが国に及びはじめたのがちょうどこの時期にあたると思います。先生が東大に赴任された1976年に、アナールの旗手ジャック・ルゴフ氏が来日し、その対象と方法の斬新さによって日本中に「ルゴフ・ショック」と形容されるほどの知的衝撃を与えたと言われています。先生もその時点から80年代前半にかけて、『アナール論文選』であるとカル・ロワ・ラデュリの翻訳といった形でアナール派紹介の一端を担われてきたわけなのですが、その後アナール派とのつきあいのなかで、例えば『パリとアヴィニオン』の「あとがき」などを読みますと、ベルナル・グネ氏らとともに、ルゴフ世代に対する微妙な距離感をお感じになっていたことが述べられています。出会いから現在に至るまで、先生のアナールに向けたまなざしの変遷をお聞きしたいと思います。まずはじめに、当時のルゴフ・ショック前後のアナールについてお聞かせ願いますか。

樺山：76年の9月にルゴフさんが見えましてね、二宮宏之さんに呼ばれて、ルゴフさんが東京にいる間はずっと一緒しました。一緒に飯も食ったし。僕は京都にいる間に短期間ながら三度パリに行かせていただいて、国立図書館で仕事をさせて頂いたり、オート・ゼチュードの人たちにも合わせていただきました。ルゴフに会ったことはありませんでしたが噂は聞いていましたし、『西洋中世の文明』は古い版ですけど読んでいたので、ああ、あの人だなということはもちろん認識していました。後に『思想』に載ったルゴフの講演は非常に刺激的でしたが、いずれかというところルゴフというより山口(昌男)さんの刺激の方が・・・(笑)。そのルゴフの話聞いたときには山口さんも一緒でして、「お前たち歴史家は何やってんだ」という例の通りの刺激的というカラフというか激しい議論を聞かされました。

いずれにせよ、こういう歴史学をどういうふうと考えたらいいかということは必須の問題だと思いました。以前私はルゴフの『中世の知識人』を翻訳しないかと言われて海外調査などでできていなかったのだけれど、その時ルゴフから『西洋中世の文明』を日本語に翻訳してくれないかと言われて、とても面白いけれど僕の力ではとてもウジウジしているうちに時間が経ってしまって結局翻訳が出ていません(笑)。私たちがアナール派なんてこと言い始める直前ですが、『西洋中世の文明』、ル・ロワ・ラデュリの『モンタイユ』、それからフェルナン・ブローデルとは日本語にならなければならぬなあ、という話を70年代後半によくしていました。結局、いわゆる「アナール派」と言われているもので最初に出たのは80年に出たベルセの『祭りと反乱』ですが、私たちのル・ロワ・ラデュリの『新しい歴史』とほとんど一緒ぐらいに作業をしていました。ル・ロワ・ラデュリは難しく、『歴史家の領域』の中でもごくわずかしかならぬ翻訳していないのですが、それでもこの翻訳で良いかどうかという確信が持てないところがいくつもありまして、アナールの方法などという前にテキストが難しくとても苦労したのを覚えています。80年にル・ロワ・ラデュリの翻訳が出て、その頃からその当時の新評論、後から移って藤原書店になりましたが、そこでいくつか仕事をさせていただきました。

僕としては方法的にはもちろん面白いのですが、それだけではなくこれはル・ロワ・ラデュリもルゴフもブローデルも含めて、戦後1950年代から70年代にかけて、このアナール派の歴史家たちが時代をどう生きたかということにとっても強い関心を持

っていました。スチュアート・ヒューズの『ふさがれた道』の中に、ブロックとリュシアン・フェーブルの話から書き起こしているところがあるでしょ。その話の延長をアナル第三世代についてやはり同じように考えなければいけないだろうと当時から思っていて、ルゴフさんにもだいぶん食い下がって聞いたこともあります。ゴジョゴジョ言っていてあまり明快には答えてくれませんでした。この前『ルゴフ自伝』が出たけれども、僕満足していないな。もっとあれはいろいろ当時考えたことがあるに違いないし、歯切れが悪いのは、僕もある時代については歯切れが悪いのは同じなのですけど（笑）、まだ言えないことがたくさんあるようです。その後もルゴフ先生には幾度かお目にかかったし、今でも年賀状をいただくのですけれど、何せ先生も偉くなりまして。忙しいしあまり外国に行くのが好きではない方で、日本にはその時を含めて三、四回しか見えていなくて、よく私たちも来ないかというのですけれど、忙しいとかなんとか言ってます。出不精なんですよ（笑）。アメリカにも二度ぐらいしか行ってないんじゃないかな。一度長く行ってますけれど。

僕が一年バりに滞在していた1983年の暮れの寒い日だったと思うのですが、ルゴフさんがお宅に呼んでくれたんです。その時、今は亡くなりましたが『知の運動』の田中峰雄さん——京大人文研の僕の後任の助手でしたが——と僕と、ルゴフ夫妻とベルナル・グネがいたんです。長い時間、ほとんど夜明け近くまで愉快にお酒飲んでおしゃべりしていました。半分はジョークで、そのジョークはほとんど僕のフランス語ではわからないのだけれど（笑）。でも、時々ふとベルナル・グネが今書いている仕事の話を持ち出しまして、それは後にどこかでも書きましたけれど、要するにピオグラフィーという人が生きた歴史というのを扱えないのは歴史学ではないという趣旨のことを、ルゴフに食ってかかるというか大声で宣言していました。僕もどこかで言いましたけれど、人間が生きて、一人の人間が時代と取り結んだ関係、その総体が歴史で、そういう議論が抜けているとすれば、社会科学として本来の姿じゃないだろうと思いました。

アナルの仕事はいろいろな性格がありいろいろな人がいるから一概に言えないが、どうしてもある種の人たちが一種の厳格な科学主義に陥りがちであって、史料もデータも科学的に処理できる方向にアナル派が限局してしまう。しかしそれは生産的ではないのではないかといったようなことを僕は言った覚えがあります。その時ルゴフも、アナル派は別にピオグラフィーや、個々に生きた人間や、人間が関わった事件を否定しているわけではないが、第三世代から第四世代にかけての人たちが、あれを科学にするために、いくらかやはり無理をしたところがある、と言っていました。彼は後に同じことを書いていますけれど、彼にもルイ9世のピオグラフィーがあります。グネもルゴフも、その意味ではそんなにスタンスが違うというわけではないと思います。書いているものにはかなり距離があるような気がしますが、あの時一緒に話していた感じでは、むしろお互いに、おまえの言うことは俺も考えている通りなんだよということで、少なくともその時点でアナル派第三世代の人たちが、その後の歴史学のあり方について考えているスタンスに変化が起っていたのだと思いますね。

『パリとアヴィニョン』で、あれはごく手軽にやったプロソポグラフィーで、今の人たちはみんな同じようなことをやっていますけれど、中世についても集団的自伝、集団的伝記分析が可能で、それは歴史学に生命力を取り戻すための一つのチャンネルだろうと、その頃考えました。

## ルネサンスと地中海

クリオ：アナル学派で、今ルゴフを中心にお話がありましたけれど、先生が生涯の大きなテーマとされているひとつに「地中海」がありまして、数年前に出された中公の『ルネサンスと地中海』によって集大成されたのではないかと思います。その発想の根幹

にはやはりフェルナン・ブローデルの存在が大きかったと思うのですが、そのブローデル、とりわけ『地中海』との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

**樺山：** 何せこんな大きな版で 1200 頁ですから、何遍チャレンジしても読みきれなくて、苦勞しました（笑）。英訳が早く出まして、正直に白状しますと、英訳を先に読みました。英訳の方が分かりやすいのです。フランス語では全部読んでいないけれど、後になって浜名さんの良い日本語訳もでたので、それはそれでいいと思うのです。もちろん（根幹にあるのは）ブローデルです。僕としては、カタロニアからずっと地中海に付き合ってきましたので、単に社会システムなり、ブローデル風に言えば気候システムであると同時に、やはり思想なり文化のシステムとして地中海を読み解きたいと言う希望は持ち続けておまして、中公版の『ルネサンスと地中海』はそのための出発点ぐらいに過ぎないと思っています。

**クリオ：** 「地中海」という柱とともに、もう一つ「ルネサンス」という大きな柱があると思うのですが、先生ご自身も上記のご著書のなかで書かれているように、そこでは花田清輝『復興期の精神』であるとか、宮崎市定「東洋のルネサンスと西洋のルネサンス」といった作品との出会い、そしてより根源的には、やはりブルクハルトとの出会いが決定的であったように思われます。先生のこれまでの人生のなかで、「ルネサンス」とはどのような位置を占めてきたのでしょうか。

**樺山：** 私たちのような時代に勉強を始めた人間にとっては、ルネサンスというのは非常に輝かしい対象でした。

**クリオ：** 「中世の暗黒」に対する「ルネサンスの光輝」、というイメージですか。

**樺山：** ええ。ここでは中世の話はほとんどしていないのだけれど（笑）、少なくとも我々にとっては、中世が暗黒であるかどうかは別にしても、ルネサンスという輝かしい文化があったという命題は自明で、そのためにブルクハルトを含めてルネサンス論というのは、学問として使えるかどうかは別にしても、学生時代から読んでいました。ブルクハルトもサイモンズもそういうふうにして読みましたけれど、いま一人の論者である花田清輝は私の小石川の家の隣にお住まいで、子供の時から見ているおじさんでした（笑）。私はルネサンスを読んできながら、職業的歴史家として中世を仕事にしていますが、ルネサンスを職業的にやったことは一度もないのですよ。つまり、ルネサンスの講義をここではやったことがない。触れることはあっても、ここでの講義はいつも中世しかやっていませんし、職業的なモノグラフィーは書いていません。その代わり、美術を含めていろんなものを読んだり書いたりしてきましたけど。

ルネサンスをやってよかったというか、ルネサンスから受けたインパクトの一番大きいポイントは、少しまとめて読んだことがあるのですが、レオナルド・ブルーニです。レオナルド・ブルーニは大きな『フィレンツェ史』を書き、そのほかにもラテン語とイタリア語で書いていますけれど、ハンス・バロンの言い方をすると、彼はシヴィック・ヒューマニスト、公民的人文主義者なんです。フィレンツェ市政府の書記官長で、クリュソラスからギリシア語を学んでいます。バロンはシヴィック・ヒューマニストという表現で、ブルーニの一代後というか正確には 60 年ほど後に出現したフィレンツェの文献学者たちとの差異を表明しています。ロレンツォ・ヴァラ、マルシリオ・フィチーノの世代と、ブルーニ、マルスッピーニらの世代の決定的な違いは、ブルーニたちは「公民的」だったということ、つまり自らフィレンツェ政治を引き取り、人間がポリスの中でどうやって生きていくかという社会的なコノテーションのなかで人文主義を論じ、またそのように行動したところにあります。ところが、いろんな事情や経緯があって、端的に言えばメディチ家の独裁以降登場した人文主義者たちは、古文書や古文書の読みは正確だし系統的にきちんと勉強しているけれど、この人たちはシヴィックではない、つまり社会や政治との関わりを一端断念したか、あるいは少なくとも一端留保した上での人文主義でした。そのために人文主義の水準が上が

ってマルシリオ・フィチーノのプラトンの翻訳ということが可能になったけれども、その間にはっきりと転換点があったのだと思います。

僕はブルーニのシヴィック・ヒューマンイズム論、つまり文字どおりフィレンツェ社会に対するコミットメント抜きには人文主義はありえないというスタンスは、私たちに對するきわめて深刻な問題提起だと思っています。「なぜそんなに政治にこだわるの」と言うのだけれど(笑)、私たちは60年代の「政治の世代」にものを考え始めて政治のコンテキストの中でもって歴史なり社会なりを考えてきています。60年代の政治といまの政治とではもちろん構造も意味も違ってきているから当時のような政治をいま私たちが引き取っているわけではないけれど、今風の言葉で言うところの公共圏、パブリック・スフィアとの関わりというのが、その後の私の学問にとっての出発点になっています。

やはり、社会なり政治なりのコンテキストの中で学問があるし、あるいは教師としてもその脈絡の中で研究なり教育なりのあり方を考えるし、あるいは場合によっては、受けた負託について答えざるを得ないだろうと思うのです。これは、私たちに對っては、少なくとも私に對っては強いこだわりです。僕の一世代下の方たちに對ってはあんなにこだわらなくてもいいだろうと思うだろうし、そんなことよりも早く論文一本ずつ書かなきゃいけないと僕も皆さんに言うから、言い方が悪いのだろうけれど(笑)。でも、やはり学問というのは社会的営みだし、それは社会に對する一種のアカウンタビリティ、説明義務を負っていると思っています。その後文学部長まで含めて大学マネージメントもやむを得ずやってきているのですが、やるからにはきちんとやりたいと思うのはそういう意味だと了解しています。

#### 現代型歴史学と1989年

**クリオ：**先ほどのお話とも関連がありますが、先生はつねに、歴史家が生きる「現代」から発せられた問題関心、というものを非常に強く歴史学の営みのなかに反映させているように思われます。先生がこれまでさまざまな機会・時点に書かれてきた現代歴史学への提言のなかでも、そのことは大きな柱の一つとして主張されてきたことだと思います。では、その「歴史的現代」というものにふさわしい「現代型」歴史学とは一体どのようなものなのでしょう。

**樺山：**戦後歴史学も当然、1940年代から60年代にかけて、そういう命題の下でもって考えられたに違いありません。ただそれが60年代になって、我々が抱えている現代的諸問題に對応できなくなったから、僕はそれについていかなかったんです。常にやはり、現代世界が抱えている問題、あるいはそれをどうやって克服するか、という問題関心との関わりでしか歴史は生まれてこないだろうと思っていまして、それは中世やろうが古代やろうが、歴史学であろうがなかろうが、同じことだと思います。

私は職業的には中世をやっていますけれど、中世を論じる論じ方というのは、さかのぼってみると、明らかにそれぞれの歴史家がそれぞれの現代の中で語っている語り方の連続であることは明らかです。そのことを意識した人もしなかった人もいるかも知れませんが、やはり歴史家ですから現代の中で歴史を語っているのだという意識は明確に持っておきたいと考えています。多くの人がそうしてきたのですが、ついそのことを忘れてしまうと、かつての現代をあたかも現在の現代であるかのように受け取りかねないし、その意味では歴史家はつねに新たな現代を生きていかなければならないという重い負担を負っているという感じがします。

**クリオ：**先生が1986年の多木浩二さんとの対談で、歴史というものをたいへん印象的に表現されています。すなわち、歴史はディアクロニックという縦糸とサンクロニックという横糸からなるいわば織物であって、そこに時が堆積している、そしてそれが裂ける瞬間、その断裂こそが出来事(エヴェヌマン)であり、歴史家はその裂け目を追跡しな

ければならない、と。そしてそれぞれの場所には、そうした「断裂」をも含めた歴史＝時間が積み重なっている、先生はそれをクルム・クロニック、「積時的」という言い方をなされていますが・・・。

**樺山：** 当時はあまり実感があって言ったのではないのかもしれませんが、そう考えてきた後に1989年、つまりベルリンの壁の崩壊と冷戦の終結を迎えちゃったのですよ。だからそれは1989年の後なのかなと思ったけれど、そのころすでにそういうふうを考えていたんですね。89年という決定的な転換点にぶつかって、それは国際秩序だけではなくて、人間社会の様々な様態がみんな一変した、文字どおり織物が裂けたんだということで・・・。

**クリオ：** 先生はその現場にいらっしゃったそうで。

**樺山：** ええ、僕はオーストリアとハンガリーの国境にいました。東ドイツ市民がハンガリーを抜けてウィーンへ出国を要求したところから始まったんです。それはウィーンのテレビで見ていたのですが、逆にウィーンからブダペストに行くバスで向こうから彼らが脱出する現場を見ました。その現場を見てからも十数年経っていますけれど、その時に、大げさに言うと、これで「世界史」が視野に入り始めたな、という感じがしていました。それまでも「世界史」ってどこにでも書いてありますし、自分でも教科書を書きましたが実感がなかったんです。しかし89年とその後に起こった様々な事件を通して、「世界史」が見えてきたという感じがします。

**クリオ：** ということは、1989年というのが、先生のなかで「世界史へのまなざし」が開かれた転換点だったというわけですね。

**樺山：** ええ。今年の1月の読売新聞のコラムにその話を書いて、「私は世界史を書きたいのだ」という偉そうなことを言っていますが、それは89年を通過したからだという感じがします。それ以来今まで、ヨーロッパだけではなくて毎年アジアにずっと行き続けているのも、アジアという視座抜きには世界史が見えないという感じがして、アジアやその他世界の様々な文明のありかたを通して、世界史が見えてくる、そういう歴史学を自分で営むことができれば、と思っています。そこには「でも、「初夢」ですよ」と書いたのですが(笑)。

#### 若い人々へ

**クリオ：** それでは最後に、いまの院生、あるいはこれから歴史学を志そうとする若い人たちに對して、今後の日本における歴史学の課題などを含めながら、お話いただけますか。

**樺山：** とてもそんな大それたことを言える立場にないのですが(笑)。博士論文を書けよとか、あの本もこれも読めよとか皆さんにいつも言っているのは、職業上の任務だからやむを得ないと思って下さい。今大学院の方々はとにかく論文書かなければいけないし、外国にも早く留学して史料も調べなければいけないし、その上で持って、博士号まで取らなければいけないという、こんな辛い時代が来たときに皆さんがいて気の毒だと思っています(笑)。先ほどから言いましたとおり、僕のはきちんとステップがあってやって来た学問ではまるきりなくて、その時々場当たりでできること面白いことを追いかけてきたら、こうなっちゃったんです。こんなことやっていたらダメです(笑)。これからはやはりきちんとしたステップを踏んで行っていただきたいと、これは職業上のメッセージです。学生さんたちだけにそう言っているのではなくて、学部マネージャーとしてはスタッフたちにも繰り返し繰り返し同じ事を言ってきたのですが、こういう時代に歴史家になろうとしている人たちは気の毒だなあとと思っています(笑)。僕だったらとてもダメだな。途中で降りているな、確実に(笑)。ですが、私のように、戦後こういう社会なり政治の中で生きてきた人間とは違って、当然異なった社会の中に皆さんは生きますので、歴史学もある程度は、かなりの程度はノーマル・サイエンスとしてのしかるべきステップをきちんと踏まなければいけないと思います。ディレ

ツタントになったり、文人になったり、あるいは自分の好きなおりにやっていって、学問ができるという時代ではもうなくなりつつあるので、ノーマル・サイエンスとして、通常科学を追いかけるようなステップをきちんと踏んでほしいと思っています。半ば以上、職業的メッセージ以上にそう思っているのも確かです。

ただ、幾度も言うように、歴史家は歴史の中で生きていますから、それは自分もそうだし、自分が取り組んでいる歴史家たちの著作もそうだし、みんなやはりそれぞれの現代の中に生きていると思うのです。社会的な、先ほど言った、パブリック・スフィアに対する自らの関わりも含めて、それは国家であったり地域社会であったりその他いろいろありますが、こうしたものとの間の接点を常にやはり意識しながら学問を組み立てていかないと、本物の学問にならないのだという感じがしています。そういう意味では、先ほどとはちょうど逆のことを言うのですが、歴史というのはそれぞれ取り組んでいる人間にとっては一つの人生ですから、ノーマル・サイエンスの形に無理に自分を押し込めるのがどうしてもやっていけない人もいるでしょう。その結果として就職できないとか博士号をとれないとかいうことがあるかもしれませんが、僕はそれはそれで良いと思っています。やはり、大げさに言えば歴史学を選んだというのも人生の選択だしその後のやり方についても人生の選択なので、みんな同じステップを踏んで、修士論文を書いたら二年目には外国に留学しそこでなんとかを調べてきたという、そういうマニュアルがあってもいいけど、あまり僕は気乗りもしていません。そうやりなさいと僕もいつも言いますが、話半分ぐらいに聞いていただきたいのです。

本当は自分の人生の事柄として、様々なパブリック・スフィアとの関わりの中で、歴史学のありかたを個々に考えていただきたいなと思っていますよね。だんだんそういう歴史学が成り立ちにくくなってきているとも言われていて、それは歴史学に限らず、文学などもますますそうだとされています。文学なんて個々の文学的感性抜きにして研究ができるとは思えないのだけれど、感性に抛らずデータによって処理できる文学研究というのが現在では必要だと言われていて、それはそうかもそれないけれど、多分つまらないだろうと思います。歴史学もそうではないかと思うのです。やはり、個人の生き方、人生にはねかえるような歴史学ができてほしい。そのためのハードルは今はかなり高く、どんどん高くなっていることも事実ですけど、選んじやったからには仕方ないですね。お気の毒です（笑）。僕の頃みたいに、気分次第で何をやっていてもはっと気がついたら学問になっていたという時代ではありませんから。皆さん、頑張ってくださいね、ということですね。

クリオ：長時間にわたり、本日はどうもありがとうございました。

2001年2月6日 於 樺山研究室

訊き手：千葉敏之

協力：草生久嗣・加藤玄・小澤実・香西秀樹・菊地重人

## 樺山 紘一 (かばやま こういち)

1941年生まれ。1969年から1976年まで京都大学人文科学研究所助手。1976年より東京大学文学部助教授。現在は東京大学大学院人文社会系研究科教授。

### 著書

- 1976 『ゴシック世界の思想像』(岩波書店)
- 1979 『「地域」からの発想』(日本経済新聞社)
- 1979 『カタロニアへの眼 歴史・社会・文化』(刀水書房 1990 中央公論社)
- 1979 『ルネサンス周航』(青土社)
- 1982 『西洋学事始』(日本評論社 1987 中央公論社)
- 1985 『ビジュアル版世界の歴史 ヨーロッパの出現』(講談社)
- 1986 『都市へのまなざし』(講談社)
- 1987 『歴史の中のからだ』(筑摩書房 1991 筑摩書房)
- 1988 『情報の文化史』(朝日新聞社)
- 1990 『パリとアヴィニョン 西洋中世の知と政治』(人文書院)
- 1990 『比較社会史』(放送大学教育振興会 1999『世界を俯瞰する眼 比較社会史入門』新書館)
- 1995 『異境の発見』(東京大学出版会)
- 1996 『ルネサンスと地中海』(中央公論社)

### 論考

- 1970 「中世トミストと後期中世政治思想(上)(下)」『史学雑誌』79-9・10
- 1970 「中世後期の政治思想」堀米庸三他編『岩波講座世界歴史 11 中世 5』(岩波書店)
- 1974 「自由心霊派異端について」会田雄次・中村賢二郎編『異端運動の研究』(京都大学人文科学研究所)
- 1974 「ゴシック世界の思想像」『思想』604
- 1977 「現代歴史学への道 近代歴史学の批判と継承をとおして」『社会科学への招待 歴史学』(日本評論社)
- 1978 「歴史家フーコーへの文脈」『現代思想 特集:ミシェル・フーコー』6月号
- 1981 「コスモス・隠喩・出来ごと 歴史の解読のために」『現代思想 特集:メタファー』5月号
- 1993 「地域としてのヨーロッパを考える」樺山紘一・長尾龍一編『ライブラリ相関社会科学 1 ヨーロッパのアイデンティティ』
- 1998 「歴史の知とアイデンティティ」『岩波講座世界歴史 1 世界史へのアプローチ』(岩波書店)
- 1999 「遭遇と発見—異文化への視野」『岩波講座世界歴史 12 遭遇と発見—異文化への視野』(岩波書店)
- 2000 「普遍と多元」『岩波講座世界歴史 28 普遍と多元—現代文化へむけて』(岩波書店)

共著・監修(複数巻にわたるものは第一回配本年を記す)

- 1977 『社会科学への招待 歴史学』(日本評論社)

- 1981 『アンデス高地都市 ラ・パスの肖像』(刀水書房)  
 1987 『長江文明と日本』(福武書店)  
 1989 『現代歴史学の名著』(中央公論社)  
 1991 『週刊朝日百科 世界の歴史』(朝日新聞社 共編)  
 1992 『名画への旅』24巻(講談社 共編)  
 1994 『歴史学事典』15巻・別巻1(弘文堂 共編)、既刊8巻  
 1995 『西洋中世像の革新』(刀水書房)  
 1995 『世界歴史大系 フランス史』3巻(山川出版社 共編)  
 1996 『世界の歴史』30巻(中央公論社 共編)  
 1997 『20世紀の歴史家たち』5巻(刀水書房 共編)、既刊4巻  
 1997 『岩波講座 世界歴史』28巻・別巻1(岩波書店 共編)  
 1998 『世界史へ 新しい歴史像をもとめて』(山川出版社 共編)  
 2000 『週刊朝日百科 世界の文学』(朝日新聞社 共編)、未完結  
 2000 『20世紀の定義』9巻・別巻1(岩波書店 共編)、未完結

#### 編訳

- 1980 E・ル・ロワ・ラデュリ『新しい歴史 歴史人類学への道』(新評論 1990 藤原書店)  
 1982 『アナール論文選』4巻(新評論 共編)

#### インタビュー・対談・座談

- 1978 生松敬三・今村仁司・木田元・村上陽一郎「現代思想の109人を考える」『現代思想臨時増刊 現代思想の109人』  
 1978 長尾龍一・柄谷行人「現代日本の思想」『現代思想 特集：現代日本の思想』12月号  
 1980 (三浦雅士)「歴史学の現在 歴史のトポロジー」『現代思想臨時増刊号 学問のすすめ』  
 1981 阿部謹也・網野善彦・石井進『中世の風景(上)(下)』(中央公論社)  
 1984 「転換期の歴史学1 権山紘一氏」『朝日新聞』7月2日  
 1984 岩本由輝・米山俊直『対話「東北」論』(福武書店)  
 1986 多木浩二「歴史という織物は裂ける」『現代思想 特集：ディススクールとしての歴史』11月号